

社会教育推進委員会の1年を振り返って（委員長所感）

1. 社会教育基本計画の位置づけについて

社会教育基本計画策定については、社会教育の範疇に入る関連計画の内容及び関連計画の策定主体との関係性について丁寧に整理しながら行ったところであるが、今回初めて、各計画から関連事業の進捗状況について自己評価をもらい、本委員会でその妥当性について検討したところである。初年度の取組ということもあり、委員の中には戸惑いを感じた方もいたが、それぞれに率直な意見を出し合えたところもあり、今後に期待したいところである。

2. 社会教育基本計画の全体像について

社会教育基本計画の中核をなすコンセプトは「学びや活動による『自分づくり・生きがいがづくり・つながりづくり・まちづくり』の推進」とした。社会教育とは、まさに「自分づくりのための環境を整える」ことを支援することである。地域住民は日々の生活の中で、様々な学びや活動を通して自分づくりを行い、生き生きと暮らしている。そのこと自体が大きな生きがいとなっているのである。一方で、個人の生活は個人の中だけで完結しているわけではなく、社会の中でつながり合い、持ちつ持たれつ、力を合わせながら成立している。私たちにとって、他者とながらすることはとても意義深いことである。そうしたつながりの結果として、いいまちづくりができるのである。

生涯学習の推進や図書館未来プラン、スポーツ推進計画、文化芸術振興計画等はどちらかというと、(集団を含みはするが)個人の学びや活動を促進する営みである。地域コミュニティビジョンや男女共同参画プラン、多文化共生推進プラン、障害者福祉計画等は、新しい時代に関する学びや活動を通して、相互理解や助け合いを基軸としたまちづくりにつながる営みであると言える。豊岡市の関連事業にこのように横串が刺されたことは大いに評価できる。ここでの気づきが、行政同士の結びつきや地域住民の学びや活動の結びつきを引き起こす起爆剤となれば、素晴らしいまちの実現へと向かうことになるだろう。

3. 成果と課題

今回の取組(社会教育推進委員会)の成果であるが、上述の通り、関係する計画・プランに横串が刺され、検証結果が一覧にまとめられたことが挙げられる。もちろん、計画の実現に向けて担当課は精力を注ぐわけだが、十分な結果につながらない場合もある。その際に、「万策尽きた」ということではなく、関連する事業との連携・協働の可能性などを想起することが重要となる。なぜならば、私たちは不完全だからである。不完全(何かが足りない)からこそ連携・協働の必然性が増すのである。「できていない」ことを補完できる大きな可能性がここにあるという認識を持ちたいところである。

また、そこに推進委員という地域住民(民間)の代表者が関わり、チェックやアドバイス機能を果たすことにも意味がある。担当課にとっても、(幾分耳は痛いかも知れないが)別の視点の提示や具体的なアイデアが刺激となり、計画の実現可能性や現実的な見直しが生み出されることは実に喜ばしいことである。また行政の捉えと地域住民の評価との間に、いい意味での違いが垣間見られることもある。数値では表されない、「質的な成果」や「つながりの副産

物」は、参加の主体である地域住民の肌感覚に拠るものが多い。もちろん、事業担当者の職員の感覚も重要である。それらの萌芽を今回感じることができた。

一方、課題である。今年度が初めてであったため、行政も委員も勝手が分からなかったところが見受けられた。行政の方は感覚が掴めたのではないかと思うが、委員については役割の理解がまだ途上であるように思う。いたずらに委員会の回数は増やせないだろうが、次年度の第1回目に、今年度の振り返りをしてもいいのではないか。自己評価をどう読み解き、どのような発言が計画の実現や行政のやる気を引き出すに効果的か、ざつくばらんに意見交換をする場があってもよい。そんなことを感じた1日であった。